

正親さん、ありがとうございました（弔辞）

正親さんと長年ご一緒させていただいた人間の一人として、
正親さんにたくさんのお話を教えていただいた者の一人として、
ごあいさつ申し上げます。

本日は、ご多用の中、またご遠方からも、こんなにも大勢の皆様にご会葬、ご
参列いただきありがとうございます。
みなさんがこうしてお見送りに来てくださったことを、正親さんもきっと喜んで
いると思います。

小林正親さんは、稀有な方でした。

学生時代から旅行関係の記事を書き、それが認められ旅行作家として活躍する
ようになります。
それと並行して、学生時代には「精神科学研究会」に属するなど、超常現象、
人間の潜在能力、心の世界を探求、研究されました。

旅行関係の取材で訪れる宿では、いつしか、泊まり合わせた人たちから人相・
手相見を頼まれ、人生相談が持ち込まれるようになり、正親さんは夜を徹して
依頼に応え、相談に乗り続けました。
その数は、約20年で10万人以上にもなったそうです。

やがて、噂が噂を呼んで正親さんの話を聞きたいという人たちが宿で待ってい
るようになり、講演会で話してほしいという依頼も増えていきました。
また、それまでの研究や知見をまとめたワープロ打ちの文章を配ったところ、
コピーがコピーを呼んで大勢の人の間に広がり、ある会社の社長さんの手に渡
ります。
ついには、その原稿に感銘を受けたその社長さんの手により、正親さんの本を
出すために出版社までつくられました。

『22世紀への伝言』を皮切りに次々と正親さんの本は出版され、来月11月9日、正親さんが63歳になるはずだったお誕生日に出版される予定の『豊かな心で豊かな暮らし』まで計55冊、それに旅行関係の本5冊を合わせ、全部で60冊の著書を遺されました。

講演会も年を追うごとに増えていき、多いときには年間300回以上にも及ぶという年が何年も続きました。

いつも笑いと学びと気づきがいっぱいの正親さんの講演はどこでも大人気で、繰り返し聴きに行く人の数も、講演を聴いて人生が変わったという人の数も、数え切れません。

こんなにも人が集い、求められるままに活動がどんどん広がり、多くの人々に影響を与え人生を変えたというのは、本当に稀有なことです。

正親さんはまさに、滅多にいない、有り難い存在でした。

長年の過労も一因になったのでしょう、2年半ほど前から体調を崩され、糖尿病からくる腎不全で体に水がたまり、2年前の10月末に緊急入院、「奇跡のセイカン」を果たされましたが、その後も入退院を何度か繰り返し療養しながら、執筆活動と講演活動を続けてきました。

昨年11月に人工透析をはじめてからは、体調も良くなっていき、講演数もまた徐々に増えてきて、特にこの夏以降はどんどんお元気になっていらっしゃいました。

そんな中、去る10月10日、11日の1泊2日で、私が代表をつとめる株式会社ぶれし〜どの主催で、『正親さんとの上高地・帝国ホテルツアー』に行っていました。

「紅葉を見に行きましようか。上高地の帝国ホテルに泊まれたら、さらに楽しいですね」

という正親さんの一言から企画したこのツアーは、好天に恵まれ、正親さんもとてもお元気ににこやかにみなさんとご一緒くださいました。

そして、とても楽しい2日間を過ごしたのち、上高地をあとにされたのでした。

ところが、山中湖にお持ちのご自身のマンションに戻られたその日の夜、就寝中に体調が急変したものと思われます。未明に病院へと運ばれましたが、平成23年10月12日午前5時41分、ご逝去が確認されました。

山中湖のマンションでは夕食のときに、「上高地のツアーはとても楽しかった」と話されていたそうで、正親さんはきっとその楽しさを胸に抱きながら、お休みの最中に、まさに眠るようにサッと旅立たれたのではないかと思います。

正親さん、驚いています。
正直言って、まだ実感がありません。

前の日まで、上高地での楽しいツアーをご一緒したのに・・・
あんなにお元気だったのに・・・
散策でもホテルから往復2,2kmをしつかりとご自身で歩かれ、
「この2年間で一番長い距離を歩きました」とおっしゃっていたのに・・・
夜の茶話会でも、
「体調がよくなってきたので、やる気がでてきました。
講演や新商品の企画もやろうという意欲が湧いてきました」
と話していらっしゃったのに・・・

まさかと言う以外、言葉が見つかりません。

本当は、今日は五反田での3時間講座でお話いただいているはずでした。
なのに、こんな形で今日を迎えることになるとは・・・

こんな日は迎えたくなかった。

お釈迦さまが死の床に伏せたとき、涙を流して嘆き悲しんだという
弟子のアーナンダの気持ちが、痛いほどわかります。

受け入れることの大切さを、正親さんはいつも説いてくださいましたが、
正親さんにもうお会いできないという現実は、
まだ受け入れることができません。
すみません。

正親さんには、本当にたくさんのお話を教えていただきました。
正親さんは、本を通じて、講演を通じて、
そして、何よりもその生き方と姿を通じて、
ものの見方・考え方・生き方を、教え、示し続けてくださいました。

「うれしい・たのしい・しあわせ」というコンセプトを教えてくださいましたのは、正親さんでした。

正親さんの本を読み、お話を聴いて、いつも「う・た・し」と思えるようにと、どれだけの人が生き方を変えたことでしょうか。

「幸も不幸も存在しない、そう思う心があるだけだ」

「投げかけたものが返ってくる」

「人は“喜ばれる存在”になるために生まれてくる」

という宇宙法則を教えてくださいましたのも、正親さんでした。

すべてはものの見方次第ということに気づき、笑顔を投げかけ、喜ばれる存在をめざして人生を歩む人がどれだけ増えたことでしょうか。

「そ・わ・か」の法則と実践についても説いてくださいましたね。

「掃除」。

正親さんのお話を聴いて、本当にたくさんの人が楽しい損得勘定も持ちながらトイレ掃除を実践するようになりました。

「笑い」。

正親さんは、力を抜くことと明るさが大切ですよといつもおっしゃっていました。

そして、いつも笑いとお顔を私たちに投げかけてくださいました。

先月の3時間講座のときも、最後に私をご参加のみなさんに、

「今日は7階の会場でしたが、次回は6階の会場になります」とご案内すると、

すかさず正親さんは「誤解（5階）のないように」とおっしゃり、

それに対して私が「司会（4階）は私です」と令いの手を入れると、

即座に「では、これにて散会（3階）」と正親さんがしめてくださいましたね。

でも、あんな楽しいかけ合いも、もうできないんですね。

「感謝」。

正親さんは、日本でこんなたくさんの「ありがとう」が言われた時代は

かつてなかったのではないかとおっしゃっていましたが、

きっとその通りだと思います。

そして、もしそうだとしたらそれは、他ならぬ正親さんのおかげです。

心から、ありがとうございます。

「五戒を言わない」という指針を示してくださったのも、正親さんでした。

どんなときも「不平不満・愚痴・偽り言・悪口・文句」を言わない、
実践はそこからはじまると教えていただきました。

正親さんご自身、

年間300回以上の講演で地球1周分の距離を移動するスケジュールのときも、
病を得てからも、そして、週3回の人工透析を続けながら各地を回られる間も、
決して五戒を言うことなく、

“淡々と・おだやかに・誠実に”日々を重ねていらっしやいましたね。

計り知れないものを、その背中で私たちにを見せてくださいました。

「今、目の前の人や物事を大切にする」生き方も、教えていただきました。

正親さんはまさに、「今の心」で生きることを実践され続けましたね。

どんなときも、どこでも、誰に対しても、“淡々と・おだやかに・誠実に”
接するその姿は、まさに「念を入れて生きる」姿そのものでした。

病を得てから、正親さんのお話が聴ける機会は以前よりも減りましたが、
それでも、「また正親さんにお会いして、お話が聴ける」ということを
どこかで当たり前と感じている自分がいました。

でも、その当たり前が、突然、消えてしまいました。

もうお目にかかることも、お話を直接聴ける機会もありません。

さびしいです。

こんな日を迎えてようやく、当たり前が当たり前ではなかったことに、
当たり前だと思っていたことが実は有り難い機会だったのだということに、
気づきました。

ただ普通に正親さんにお会いすること、それすらできなくなった今、

「何事も起こらない普通の日常が幸せの本質」

という正親さんの言葉が身に染みます。

“普通の今”という瞬間がどれだけ有り難いかを、痛感しています。

本当にたくさんのごことを教え、示してくださいましたが、
私たちは正親さんからもう一つ、とても素晴らしいものをいただきました。

それは、「良き仲間」です。

正親さんはよく、この話をしてくださいましね。

あるとき、お釈迦さまに弟子のアーナンダがたずねた。

「お師匠さま、良き友を得ることは聖なる道の半ばだと思えるのですが、
どうなのでしょう？」

すると、お釈迦さまが答えて言った。

「アーナンダよ、良き友を得ることは、聖なる道の半ばではない。
良き友を得ることは、聖なる道のすべてである」

正親さんご自身、いつもたくさんの方の良き友に囲まれ、

友人や仲間を何よりも大切にされました。

講演も本の執筆も、友人からの頼まれ事に応え続ける形でなされたものでし、

当初は拒んでいらっしやうった人工透析をついに受け入れたのも、

友人が主催し多くの方が待っている講演会に約束通り行くためでしたね。

正親さんは最後まで、

身をもって「聖なる道のすべて」を行く生き方を示してくださいました。

そして、正親さんのおかげで、私たちにも良き友ができました。

正親さんのもとに集い、「うれしい・たのしい・しあわせ」なときを過ごせる

「う・た・し」仲間とのご縁をたくさんいただくことができました。

この良き友、素晴らしい仲間たちは、

正親さんが私たちに遺してくださいましたかけがえのない宝物です。

以前、講演会で良寛さんの辞世を紹介されたことがありましたね。

形見とて

何か残さん

春は花

夏ほととぎす

秋はもみぢ葉

それになぞらえて、正親さんもご自身の辞世の句を詠まれました。

我が形見
高き青空
掃いた雲
星の夜空に
日に月に

高く澄み渡った青空を見たら
掃いたような白い雲を見たら
それが私の形見だと思ってください
きれいな星の夜空や
太陽や月を見たら
それが私の贈りものだと思ってください

思えば、ツアーのときの上高地は、まさに「高き青空 掃いた雲」でしたね。
昼にはあたたかな「太陽」、
夜にはきれいな「星空」と満月を迎えようとする明るい「月」。
そして、にこやかな笑顔の良き仲間たち。
正親さんはこの句のとおり今生の最後を飾り、旅立って行かれました。

正親さんにお目にかかることはもうできませんが、
高い青空や掃いた雲、星空や太陽や月を見ることはできます。
そのときには、ああそうだ、正親さんが私たちを見ていてくださっているんだ
と思出すようにしますね。

正親さんの肉体は死を迎えてしまいましたが、
こうして私たちが思出す限り、そして正親さんのことを語り継ぐ限り、
正親さんの存在はずっと生き続けます。

お釈迦さまも亡くなる時、嘆き悲しむアーナンダにこう言ったのでしたね。

「アーナンダよ、私の肉体が存在するということに依存してはならない。
私が生きていくということに依存してはならない。
自らをよりどころとして、生きていきなさい。
私があなた方に説いた法（教え）を闇の中の光として、生きていきなさい。」

私たちも、この「自灯明、法灯明」の言葉を胸に、
正親さんから教えていただいたことをともしびとして、
自らをともしびとして、そして自らがともしびとなるよう、生きていきます。

「まだまだですね」と正親さんに言われるようなこともあると思いますが、
行きつ戻りつしながら実践を重ねていきたいと思っています。

上高地帝国ホテルでの最後の茶話会で、
正親さんは「親孝行」の話をしてくださいました。

「親孝行というのは、親が生きている間にしてあげるものではありません。
本当の親孝行は、親が亡くなったときからはじまります。
親が亡くなりあちらの世界に行って、こちらの世界を見ているときに、
『ほら、見てください。あれが私の子どもです。あんなに人に喜ばれながら
楽しそうに生きているのが、私の子どもです』
と親が自慢できるような生き方をすることが、最大の親孝行なんですよ」

わかりました。正親さんへの恩返しは、これからはじまるんですね。

正親さんがあちらの世界で、

「ほら、あの人たちが、私の話を聴いたり読んだりしてくれた人たちですよ。
いつも笑顔と感謝の心を忘れず、喜ばれる生き方を実践している、
私の良き仲間たちです」

と自慢できるように生きていくことが、
私たちができる正親さんへの最大の恩返しですね。

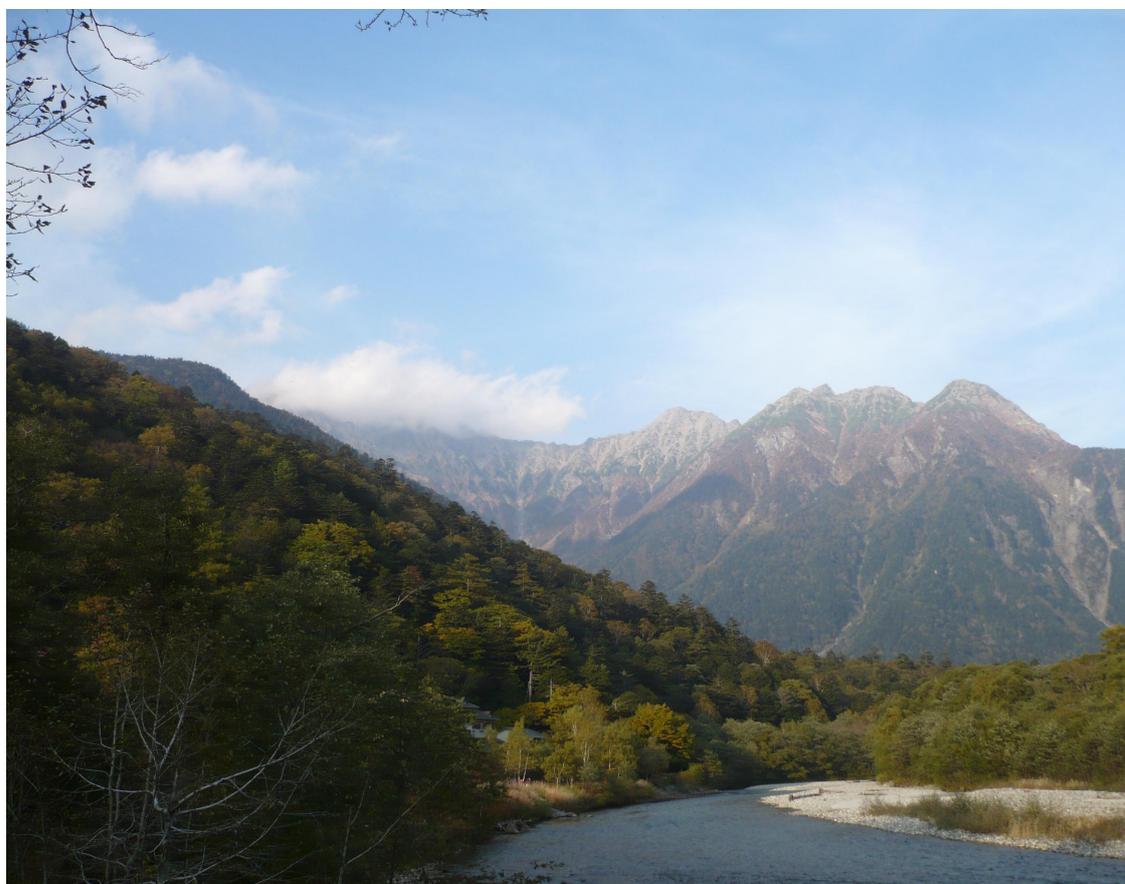
肝心なのは、これからです。

いつも“淡々と・おだやかに・誠実に”生き切った正親さんをお手本として、
これからは私たち一人一人が、
良き仲間たちとともに、
「う・た・し」な心で、
喜ばれる存在を目ざして、
実践を重ね、語り継いでいきます。

正親さん、本当にありがとうございました。
そして、これからもよろしくお願いします。

平成23年10月15日
小林正親さんのお通夜にて（加筆修正済み）

正親塾 師範代 高島 亮



平成23年10月10日『正親さんとの上高地・帝国ホテルツアー』にて